

①名前シール

(カメラ提出)名前を記入

フリガナ	フリガナ
姓	名

(郵送提出)会員番号シールを貼付、ない場合は名前を記入

提出方法を裏面で確認してから提出してください

②会員番号

※②は郵送提出で会員番号シールがない場合は記入してください。

3333

得点 **33** /50

実力UP!

赤ペン先生の個別指導で 提出⇒返却⇒復習で実力UP!

※解等用紙は機械で読みこみ、パソコンを使って指導するため、解等用紙原本は返却できません。
※解等用紙を間違えると受け付けることができません。

【古文】「誰が」「どうした」を意識したあらすじのとらえ方

記述力UPの魔法

現代語訳の問題では、問われた箇所をまず品詞分解すること。品詞ごとに分けたら、「文脈や文の構造を確認しながら、助動詞に注意して一語ずつ」、語順通りに丁寧に訳そう。主な助動詞の意味や、訳し方など、知識を身につけておくことも大切。

▼傍線部の主語を正しくとらえることができたね。主語を特定する読解のコツを使って、傍線部の前の「人物+「』」の形に気づき、「内藤」が主語であることがポイントだったね。

(2) (内藤)

▼登場人物を正しくとらえることができたね。古文では、今回の問題文のように同じ人物が複数の呼び名で言い換えられていることが多い。今回は「傅大納言」(＝道綱・一の大納言)、「人わらはする侍」(＝内藤)をとらえられたかがポイントだ。

- イ 傅大納言・内藤・異侍ども
- ウ 傅大納言・道綱・内藤・異侍ども
- エ 傅大納言・内藤・一の大納言

(1) ア 傅大納言・人わらはする侍・内藤・異侍ども

「人わらはする侍」の名前が「内藤」。同一人物の呼び名を確認しよう。

13

難しかったぞ

主語がわかるとあらすじをつかみやすくなるよ。「誰が」「どうした」を意識して読もう。



▼「どうした」に対する主語を正しくとらえよう。「その家に……人わらはする侍ありけり。字をば内藤とぞいひける」とあるように、傅大納言の屋敷に仕えていたのは「内藤」。また、冒頭に着目して「道綱」は「傅大納言」の名前であることを押さえよう。

- イ 道綱を気の毒に思った傅大納言は、自分の扇物子を与えた。
- ウ 傅大納言が袖を打ち合わせている様子を見て、人々は笑った。
- エ 道綱は、内藤の得意気な様子を伝え聞いて笑った。

(4) ア 傅大納言の屋敷に仕える道綱は、物事を滑稽に言う侍だった。

▼傍線部は「人／わらは／する／侍／あり／けり」と品詞分解できるね。また、「人物+あり」の形に着目すると、波線部の主語は「侍」、述部は「ありけり」。波線部の主語はとらえているので、文章の構造に注意して、訳すことが必要だ。

(3) 侍が人を笑った

※「記述力アップのコツ」は上段一番左
人を笑わせる (-5)
いた (-2)

国語 読解力・記述力UPアドバイス

記述解答の
第一歩！

キミの読解力判定

★★★

「誰が」「どうした」を意識したあらすじのつらえ方



ポイント① 登場人物を見つける

◇OK◇

▼人物の言い換えに注目し、複数の人物を整理してつかむことができるね！

Check

ポイント② 登場人物が「主語」であるかを判断してあらすじをつかむ

▼「誰が」を押さえ、「どうした」と結び付けてあらすじをつかむことができていないところがあった。

赤ペン先生からのメッセージ

頑張って提出してくれましたね。古文では、同じ人物でも呼び名が変わることが多くありますが、誰が登場しているかを整理でき、主語もつかむことができていました。せっかく「誰が」をつかんでいるのですから、「どうした」と結び付けてあらすじ把握に役立てましょう。模試などで、初めての文章を読むときにも、まずあらすじをつかむことが大事。「誰が」「どうした」を結び付けて読むコツを定着させましょう。次回の提出も待っていますね。

国語担当

より

自分の解答と見比べることで、記述力をさらに磨こう！

振り返りでさらに
記述力UP

(3)

解答例

人を笑わせる | 侍が | いた。

採点基準

- ① 「侍」を主語として訳している。
- ② 「する(す)」を「させる」などと訳し、「人」を使役の対象としている。
- ③ 「けり」を「くた」などと訳している。

「記述のルール」を守って書こう

記述問題では、設問文に書かれていなくても、一般的に意識すべきルールが存在します。答案を見ていると、内容は合っているのに、ルールに即していないために惜しくも満点にならないものがよくあります。

今回の(3)のような古文の現代語訳の問題では、誤字・脱字が多いです。解答例の人物名などは、問題文中の表記で正しく書くようにしましょう。

「特に気をつけたい 記述のルール・注意点」

- ・字数制限のある設問では句読点も1字として数える
- ・誤字脱字に注意し、略字にせず正しく書く
- ・問い方に対応した文末表現を用いる
- 例) 「なぜか」→「から」
- 「ふんふん」とか「ー」「ふんふん」